

第13章 生活科ワークショップで 学習をつくりだす子どもを育てる

生活科はワークショップの学び方と相性のよい教科です。体験や遊びを大切な学習活動と位置づけていますし、子どもたちの選ぶ題材も、学習指導要領の内容とさまざまな方法で結びつけることが可能です。生活科ワークショップでは、教師もワークショップの形式に押し込めすぎずに、子どもたちのやりたいことを一緒に楽しみたいところです。教師の仕事は、振り返りや共有をよいタイミングで行ってあげることです。

さて、2年生の実践から、生活科ワークショップを楽しむ子どもと教師の姿を一緒に見ていきましょう。

4月 春は探すものではなくて、遊んで気づくもの

私(富田明広)は、「春を探そう」という投げかけはしないようにしています。春は、子どもたちが外で遊んで気づいたことのなかに必ず含まれているもので、教師が無理に呼びかけなくても、子どもたちは必ず魅力的な春を自分なりに探してきます。そこから、「春が来たね」という季節の到来や、季節感をふんわりと共有できればいいと思っています。

だから、その言葉に代わって使う言葉は、「みんなに伝えたいものを見つけておいで」です。これで十分です。こんな大枠な目標から、クラスがはじまったばかりの人間関係も、個々の活動とその共有を通して深まっています。春とはまったく関係ないものも、のちのちの生活科ワークショップでは芽吹く種になる可能性があります。

時間とエリア(校庭と中庭)を決めて、子どもたちを信頼して放りだしてみました。エリアをはみだす子どももいるでしょうが、それも指導の機会ということで、安全や学習マナーについて念押しをただけで行かせてみました。

早速、池に顔を近づけて、水面をジロジロ見つめる三つの背中を見つけました。「生き物、いない……」とつぶやく子どもたち。まだ薄寒い4月、そう簡単には発見できませんよね。学校のソメイヨシノはとつくに花が散り、幹の低いところに若緑色の新芽が見えます。

「先生！ 新しい葉っぱだよ」と呼ぶ声が聞こえてきました。

「いいね。写真を撮っておこうか」

継続的に写真を撮ったら面白そうですが、結局子どもの興味が続かず、継続的な活動にはつながりませんでした。こんなことは日常茶飯事です。

中庭の隅に生えている背の低いササ。練人くんは、何とそのササの新芽が地面から少し突きでているのを発見しました。恥ずかしがり屋の練人くんですが、教室に戻ってきてから、生活科ジャーナル(共有の時間に振り返りや記録のために使用していたミニ・ノート)に教師にしか読めない拙い字でこう書きました。

「タケノコが出てた」

一方、利香子さんは、咲きはじめたツツジの花を集めてきました。落ちた花ばかりを集めてきたようで(本当かなあ?)、帽子の中には花がどっさり入っています。バケツに水を張って、その中にツツジを放り込み、とりあえず浮かべたり水をかけたりして遊んでいます。この子どもたちは、中庭から教室に移って活動を続けていました。

ダンゴムシは、やっぱり子どもたちの人気者です。コロコロと逃げても、あっけなくつままれてしまう愛嬌のあるヤツです。

「先生、飼いたい！」(やっぱり)

「虫かごはどうする？」

早速、子どもたちは話し合いをはじめていました。

2時間続きの生活科のおしまいの時間が来ると、みんなちゃんと帰ってきました。「みんなに伝えたいもの、何を見つけた？」と問いかけたら、「桜！」、「ツツジ！」、「ダンゴムシ！」という返事です。「来週は生活科で何をしたい？」と尋ねると、「オタマジャクシを見つけたい！」、「ダンゴムシを捕まえたい！」、「時間がなかったから色水をつくりたい！」と、子どもたちは次の時間の計画もあるようです。ひとまず、子どもたちを春のなかで遊ばせてみて、それからどのように子ども一人ひとりを促していったらよいかについて、ゆっくりと考えてみることにしました。

授業の最後、生活科ジャーナルに、先生に伝えたいことを子どもたちは書いています。私もすべての子どもの興味関心を追えるわけではないので、このジャーナルを読むことで、次の授業で気になることを書いている子どものあとを追いかけて、一緒に見させてもらうことができます。

学習が子ども自身のものと思えるように

よくある生活科の学習ですが、「春を探して、見つけたよカードを書こう」と黒板に書き、二列になって校庭を練り歩くような授業があります。しかし、興味関心もさまざま、得意な表現方法もさまざまな固有の学習スタイルをもつ子どもたちにとっては、選択肢もなく画一的すぎて、個人の強みが発揮できない学習展開になってしまいます。「春を探す」という教師の意図を心に留めて活動を行える子どももたしかにいますが、それは教師の意図に沿おうとする意識のもとに行っていることが多く、学習が子ども自身のものになっていません。

いろいろな子どもたちが、自分の興味関心に応じてダンゴムシやツツジ、ササの新芽に惹かれ、興味をもち、それをじっくりと見つめたり、夢中になって遊んだりすることで、学習が自分のものになっていきます。要するに、学習の主体者意識です。

子どもの視点で学習を見たとき、学習課題が一つだけに縛られていると、「それ以外はやらずに、教師の指示を守りなさい」という裏のメッセージを読み取ることでしょう。それを繰り返すことで、子どもは学習における主体者意識を少しずつ手放していき、「学校化」してしまうのです。

2年生の子どもたちは、教師が大好きで、教師の意図をしっかりと汲みとって春を探してきてくれるはずですが、自己決定や学習に夢中になる感覚を養うためには、低学年からこのような主体者意識を育む学習が大切です。言うことを聞くからといって教師の意図通りに動かしてしまうと、そのツケは高学年や中学校で現れることとなります。

春と遊ぶ子どもたち

2年生の子どもたちは、この「春」のユニットから活動を大きく展開させていきました。個性豊かな子どもたちを十把一絡げにして、一つの学習活動に丸め込むよりは、時間の許すかぎり、この「春」のユニットを楽しんでみたいというのが私の考えです。

生活科学習指導要領の「(5)季節の変化と生活」と「(7)動植物の飼育・栽培」を主な内容として念頭に置いて活動していますが、子どもたちのどのような活動が1年間の豊かな学習に結びついていくか分かりません。「春」じゃなきゃダメ、「生き物」や「植物」でなければダメという制約を設けずに、子どもたちが飛びついた題材から学習を発展させていこうと私は考えています。

子どもたちの興味の枝葉は、いろいろなところに伸びていきました。

- ・ツツジの花の染め物
- ・クチボソの飼育
- ・ダンゴムシとカナヘビの飼育
- ・ササの新芽の成長
- ・梅の実の採集
- ・池の微生物の観察

このなかから、いくつかのエピソードを紹介します。

ツツジの染め物

ツツジの花を集めていた利香子さんたちは、色水づくりに発展していきました。お花から色水をつくる学習経験のある子どもが、たくさんツツジをビニール袋に入れて、揉みはじめます。幼稚園でもやったことがあるそうです。利香子さんは自分でビニール袋を家から持ってきて、友だちにやり方を教えています。ツツジも、傷んでいない鮮やかなものを選んで採ってきているようで、どうやらこだわりがあるようです。

「先生、ツツジの色水では紙に書けません」

利香子さんたちは色水を使って絵を描きたいようですが、色が薄すぎて、コピー用紙に色をのせてみても染みができる程度で、満足できないようです。

「薄い色でも色をつけられないのかな？」

その日の放課後、私もいろいろ調べてみると、ミョウバンを使って白い布に染色するという方法を知りました。利香子さんたちには、この学習を提案してみることにしました。

ミョウバンや白い布は、利香子さんのお家に協力してもらえるはずですが。学校にも、布の端切れが家庭科室にあるかもしれませんし、利香子さんたちに、家庭科専科の先生にお願いに行くという学習も楽しそうです。次のカンファランスが楽しみにになりました。

利香子さんたちが進むべき道を提案することは最小限にして、利香子さんの前で学習の選択肢を広げてあげるようなカンファランスをしてみました。最終決定をするのは利香子さんです。

私は、この活動を初めから全員にやらせるといった計画は立てていません。利香子さんたちが育てた学習ですし、ほかの子どもは、それに負けないほど魅力的な学習を育てようとしています。自分で育てた学習だからこそ、生活科は面白いのです。ひよっとしたら、利香子さんは「みんなでやってみよう」と言うかもしれません。そして、ほかの子どもが「僕たちもやってみよう」と言うかもしれません。そうなるから、初めて考えます。

ササの新芽を観察する

練人くんは、自分の夏野菜(後述)よりもササのほうに興味があるようです。裏庭の奥に生えているササの芽を見に行き、定規を当てて長さを測ったり、ほかの場所に芽が生えていないかを確認したりしています。たしかに、最初に発見したときよりも成長しているようです。時々、練人くんは生活科ジャーナルに長さを書いて教えてくれました。

恥ずかしがり屋の練人くんには、自分の大好きなササを友だちに教えてあげる学習機会があるといいと私は考えていました。すでに2週間も通い続けているのですから、こだわりも出てきているでしょう。練人くんを呼び止めて話をしました。

「練人くんのササが大きくなっていることをこのカードに書いてみてよ。そうしたら、練人くんしか気づいていないこのササを、みんなが見たいといってくれるかもよ」

練人くんは、とりあえずカードを受け取ってくれました。練人くんは、そのカードにササが成長していることについて、絵と文章で書きました。

利香子さんと違って練人くんには、教師は進むべき道を示すような提案をしています。つまり練人くんには、選択の幅を狭くした提案をして、自己決定ができるように支援をしているわけです。そして、カードを使った提案を具体的に例示することによって、進むべき方向性を示しました。子どもたちの主体者意識のレベルに合った支援を行うということです。

それゆえ、「カードをみんなで書きましょう」という指導はほぼしません。練人くんのササのカードをミニ・レッスンで取りあげ、これを描くとどんなよいことがありそうかと、話し合えばいいのです。

夏野菜も掲示板もバラバラ

本校でも夏野菜の学習に取り組んでいますが、学年で相談して、野菜の種類は一人ひとりバラバラ(数種から選択)となっています。鉢植え野菜にして個人で面倒を見たり、必要に応じて置く場所を自分で決められるようにしています。名づけて「MY野菜」。同学年の教師たちも、一人ひとりが自分の学習を大切にできる環境をつくりたいという思いで取り組んでくれていますので、バラバラ野菜も鉢植え野菜も賛同してもらえました。

教室の掲示板に一人一つ用意されている連結掲示ホルダーには、野菜の観察カードが入っている子どもいれば、クチボソの飼い方のコピーが入っている子どももいますし、梅の実をつかんで微笑んでいる写真を入れている子どももいます。子どもによって、連結掲示ホルダーに入っているものもバラバラです。

しかし、どの子どものホルダーにも、これまでの生活科ワークショップで活用したシートや写真が5枚程度は入っています。教室に家庭用のコピー機が置いてあるので、いつでもコピーが可能です。子どもたちは、ホルダーにはどんどん差し込んでいくようにすすめられているので、掲示物は刻々と変化していきます。そのため、教師も写真を手渡して入れるように言いますし、共有の時間にホルダーに入れるものを決めましょうと促すこともあります。

同じことをしたり、揃っている掲示物を眺めたりすることで、知らず知らずのうちに子どもたちは、ほかの子どもたちと同じことをしなければならぬと学びます。揃っていることで、揃っていない数人の子どもが目立ってしまうことになり、揃えなければならぬという歪んだ支援をしてしまいがちです。学校で過ごしていると、ほかの友だちと同じことをしなければならぬことが多いわけですが、せめて生活科だけでも、子どもが自分の学習を誇りに思うような活動をさせてあげたいと思っています。

ミニ・レッスンも共有の時間に

生活科ワークショップの場合、無理にミニ・レッスンを行う必要はないでしょう。それよりも、子どもたちがみんなに伝えたいという気持ちのほうを大切に、ミニ・レッスンの時間が共有の時間のようになる場合が多くありました。

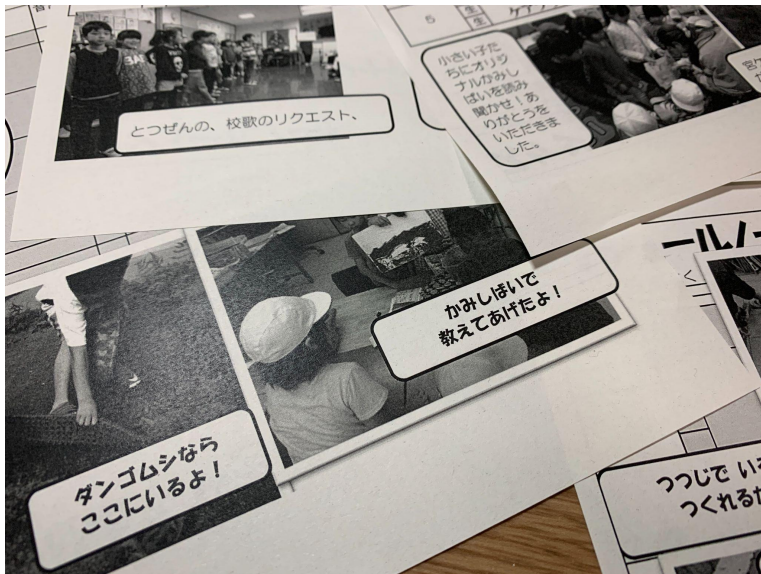
授業の最後に行われる共有の時間は、友だち同士で今日のニュース(授業のなかでみんなに知らせたいこと)を伝えたり、お互いの野菜を見せあったりして情報交換をすることや、生活科ジャーナルを書くことに使っていました。しかし、授業の残り5分～10分で子どもたちの伝えたいという気持ちを満足させようとする、自ずと時間が足りません。

アオムシがつかないように予防策を考えている智紀くんがいます。その姿を見ると、授業の最後の共有の時間よりも、最初のミニ・レッスンの時間に教師が場を設定したほうが、クラス全体にとってよいと私は判断しました。

智紀くんは、虫が飛来しないように、アルミホイルを野菜にぶら下げると言いました。智紀くんがみんなの前で実演すると、子どもたちからはさまざまな反応が出ました。やりたいという子どももいれば、「太陽が当たらなくなるとダメなんじゃないかな？」と疑う子どももいます。子どもたち全体に、立ち止まって考えるという場が生まれました。

最初のミニ・レッスンの時間には、智紀くんのように教師の意図でよい活動をしていたり考えをもっていたりする子どもを選び、クラスのみんなに向けて情報発信をせよと、活動のバリエーションが広がります。

学級だよりで発信



学級頼りで発信

私自身もそうですが、保護者のなかには小学校時代に生活科を学習として経験したことのない人も当然います。「学級だより」を通じて、子どもたちの体験や活動を中心に、自立した学び手へと育てることを目的とした教科であることをしっかり伝えていきたいものです。そして、子どもたちの笑顔や充実感、時には迷いなども写真とともに掲載し、保護者に安心してもらうように努めます。

生活科ワークショップの早い段階から、子どもたちは家族にも自分のやりたいことを手伝わせようとします。その際、どこまで手助けをして、どこから自分でやらせるのか、といったところが支援のポイントとなるでしょう。保護者のなかには、学校が何もしていないと判断したり、わざわざ高価なものを購入するといった過剰な支援をしてしまう人も出てきます。懇談会などで、生活科ワークショップと生活科自体の根本的な考えである主体者意識を育む学習について話しておく、電話や連絡帳などの簡単なやり取りで理解していただけるようになります。

7月 ポートフォリオを広げて1年生に説明する

7月、2年生が1年生に対して学校を案内するという活動がありました。これは、生活科ワークショップでやってきたことを1年生に伝えるチャンスです！ しかし、この日に向けて子どもたちは、一生懸命準備を重ねて

……という様子ではありませんでした。ギリギリまで、子どもたちは自分のやりたいことに熱中したままだったので。

たとえば、MY野菜、クチボソ、カナヘビ、ダンゴムシ、梅の実採集など、自分のプロジェクトを目いっぱいやって、やっと発表の1週間前ぐらいになってから、「そろそろ1年生に伝えるための準備するかー」というようなマイペースな雰囲気でした。それほど、自分のやりたいことに没頭できる時間を子どもたちは楽しんでいました。

もちろん、1年生のことを考えて、しっかりと準備をする子どももいました。画用紙に学校の楽しいことを紹介する絵を何枚も描いてその日を待っている子どももいましたが、多くの子どもは、前述したよう自分のこだわりをトコトン追求できる生活科ワークショップにのめり込んでいました。こんな調子なので、1年生が2年生の教室に来てもうまく説明できるのかと不安に思っていました。

ところが、こんな私の心配は杞憂に終わりました。自分のこだわっているMY野菜のところに1年生を連れていき、アルミホイルだらけになっている理由を説明したり、クチボソやカナヘビの水槽をタッチングプールにして触らせたり、梅の実やササの新芽が触れる場所に行って紹介したりと、2年生になった自分たちがやっている生活科がどんなに楽しいかについて、情熱を込めて1年生に紹介していったのです。

熱中していることを伝えたいという気持ちは、子どもたちの力を120パーセント発揮させていました。明らかに事前の準備をしていない子どもでも、1年生の手をグイグイと引いて、一緒にダンゴムシを捕まえ、お兄さんお姉さんぶりを発揮していたのです。

一般的な教師の指導計画では、やはり1週間前から全員が準備するというのが常套パターンでしょうが、私のクラスでは、子どもたちによって準備期間はさまざまでした。それも、自分で決められるようにしていたからです。紙芝居などをつくってしっかり準備したい子どももいれば、準備はそこそこにして、ダンゴムシの生態を観察している子どももいました。ミニ・レッスンを通じて時間や場所などは伝えましたが、それぞれのペースで準備ができるように、一斉に準備時間というものは設定しませんでした。

1年生に説明するときにとっても役に立ったのが「お宝ポートフォリオ」でした。これには、これまで子どもたちが集めてきた野菜の写真、さまざまな観察シート、生き物の飼い方について書かれている本のコピー、葉っぱを採集して紙に貼り付けたもの、どこからか拾ってきた木の实、色水で書いた文字のプリント、そして生活科ジャーナルなどといったものが大切に保管されています(グチャグチャに腐った梅の実が出てきたこともありましたが)。

自分が行っているプロジェクトによって、お宝ポートフォリオに入れている写真や資料がまったく違うので、十人十色のポートフォリオが完成します。これなら、2年生一人ひとりが1年生に紹介をしても、内容がまったく同じになることはありません。

このポートフォリオを見せながら、MY野菜の成長について説明をしたり、今まで見つけた生き物を紹介したりと、わずかな準備期間でこれまで積みあげてきた自慢の学習を1年生に紹介することができました。大切なことは、一人ひとりの子どもが自分自身の言葉で語っているということです。自分が楽しんできた学習に誇りをもって、みんなが1年生に伝えようと頑張っている姿は、素晴らしい教室の風景でした。

いつまでも生き物や植物とかかわっているわけにはいかないので、夏休みまでという区切りを設けましたが、季節が変われば同じように子どもたちはまた次の季節と遊び、たくさんの発見をすることでしょう。生活科ワークショップの時間は、いくらあっても足りないかもしれません。子どもたちと新しい魅力的な材に出合わせるために、「1年生に伝える会」でひとまずは区切りとしました。

9月 まち探検——「2年1組お助け隊」結成

「町の人たちのお助けをしたい！」

「まち探検」の2回目が終わったあと、何人かの子どもたちが言いはじめた言葉でユニットの目的が形づくられていきました。私たちの町のお助けをする「2年1組お助け隊」です。「ありがとう！」と言ってもらえるような、町のヒーローになるのです。

クラスで散歩に出掛けたあとの子どもたちのジャーナルを読んでもみると、公園にごみが落ちていることを気にしたり、あのレストランはおいしいと教えてくれたりと、さすがに7年間暮らしているだけあっていろいろなことを日頃から感じたり考えたりしているようです。子どもたちの町を大切にしている気持ちが伝わってきました。そして、自分たちも町のために役立ちたいという強い気持ちがあるようです。

「町のごみを拾ってきれいにしたい」

「レストランの宣伝をしたい」

「お花屋さんの宣伝をしたい」

「おじいちゃん、おばあちゃんが横断歩道を渡っていたら、手を引いてあげたい」

「小さい子どもと一緒に遊んであげたい」

みんな、いろいろな形で町のお助けをしたいということが分かりました。

「これをプロジェクトにして、2年1組お助け隊のプロジェクトチームをつくりましょう！ さあ、みんなが活躍すれば、きっと町の人たちは笑顔になり、『ありがとう』と言ってもらえますよ」

表13・1 2年1組お助け隊プロジェクトチームの目的

<ul style="list-style-type: none">・カレー屋さんを繁盛させよう・パン屋さんを繁盛させよう・お花屋さんを宣伝しよう・ごみを拾ってきれいにしよう・小さい子どもと遊んであげよう・おじいちゃん・おばあちゃんを手伝おう
--

最初、まち探検に行く前に、私は学習が深まりそうな地域の店や人を対象にして挨拶回りを行っていました。「子どもたちが散歩をしたときにちょっと立ち寄るかもしれないので、よろしく願いします」という内容を伝えて、あまり具体的なお願いをあえてしないようにしていました。給食のないときにお昼ごはんを食べている顔なじみのお店や、利用していたクリーニング屋、MY野菜を購入した生花店などから、快くOKの返事がもらえました。このように、子どもが行くであろうお店などに、あらかじめお願いをしておくことが大切です。

私が準備していた地域の材ですが、予想に反して、子どもがあまり興味をもたなかったものもあります。そういうものはプロジェクト化することはできません。また、こちらが予想していなかったものでも、面白いことになりそうなテーマはプロジェクト化していきます。「おじいちゃん、おばあちゃん」や「小さい子ども」というのは、予想していませんでしたが、よい方向に発展しそうなテーマです。

春探しのときに、子どもたちの興味関心に合わせて、いくつかのプロジェクトチームをつくってグループ単位で子どもたちが動くようにして、まち探検プロジェクトのグループ活動に慣れさせておきます。まち探検において、クラスの子どもすべてが一つのお店とかかわるという実践がよく見られますが、多様なプロジェクトがゆるやかに情報共有しながら「町を助ける」という目的のために活動すれば、一人ひとりが主体者意識をもって活動に入り込むことができます。

教師がすべてのプロジェクトのルールをがっちり敷いておくのではなく、ある程度の方向性を町の人と打ち合わせて、あとは町の人と子どもたちとの話し合いに委ねていくというのがポイントです。各方面に電話をするというのは少し手間ですが、その分、町の人と子どもたちのコラボレーションが想像以上に発展するという可能性が高まります。また、子どもたちもご協力いただく方も、学習に主体者意識を持てるようになります。ある程度計画をしたうえで、計画外のことを楽しむというのがワークショップの楽しさです。

保護者への協力を

複数のプロジェクトを同時に進行させていかなければなりません。まち探検において、カレー屋さんに行きたいという子どももいれば、パン屋さんに行きたいという子どももいます。教師は私一人しかいません。どうしたらいいでしょうか。

私の学年は、まち探検において、必ず保護者ボランティアにお手伝いをしてもらうことにしました。複数の保護者が協力してくれれば、活動できる範囲が一気に広がります。

たとえば、ごみ拾いをしたり遊んで待っていたりする公園を本拠地にして、保護者引率の別動隊にカレー屋さんやパン屋さんまで子どもたちを連れていってもらいます。あるプロジェクトが活動の山場であれば、私が別動隊に入り、本拠地の子どもたちの安全を保護者に見てもらいます。このシステムのおかげで、効率的に子どもたちの目的を達成することができるまち探検ができます。おまけに、保護者も町を助けるプロジェクトに加わってもらうことになるので、お助け隊のファンクラブが少しずつ増えていきました。

保護者ボランティアとのつながりによって、子どもたちのプロジェクトが大きく発展していくことができました（後述）。保護者は、私よりも古くからこの町に暮らしており、それぞれネットワークを構築しています。町とかかわるこのユニットにおいて、保護者の協力を得ないというのは、「強力な味方」をみすみす逃すようなものとなります。

公園を掃除しよう

どんどん、まち探検に行きましょう。週1回2時間ぐらいのハイペースでまち探検に出掛けています。今回は、初めてチームに分かれてのまち探検なので、子どもたちも強い目的意識をもっています。ごみ拾いチームに必要なものは、ビニール袋と軍手です。すでに準備は整っています。

ごみ拾いチームは、わんぱくな男の子が多く、やる気に満ちあふれています。リーダーの子どもを中心に縦割りのプロジェクトチームになっていますが、小さな会社のような感じがして見ていて面白いです。

横浜駅に近い宮谷小学校の周りには、やはりごみがたくさん落ちています。ペットボトル、空き缶、お菓子のごみ、紙くず、乾電池、落ちすぎていて拾いきれません。子どもたちが持ってきたビニール袋は、すぐに満杯になってしまいました。

ごみをたくさん拾って学校に帰り、これでプロジェクトは終了、ではありません。このごみをどうしたらよいのでしょうか。ペットボトルと空き缶は、洗ってから乾かして分別しなければなりません。プラスチックごみと紙ごみ、燃えるごみと燃えないごみ、そして乾電池は別です。子どもたちも、ここまでは予想していなかったようです。

子どもたちはごみ拾いをして初めて、ごみは拾うだけではなく、正しく捨てる必要があることに気づきました。学校の用務員さんが正しいごみの分別を子どもたちに伝えながら、一緒に手伝ってくれました。

ペットボトルや缶は洗うだけですが、そのほかのごみには、小さいプラスチックや金属などが混じっています。それ以上に、子どもたちはタバコの吸い殻が気になったようで一生懸命拾ってきましたが、学校では出ないごみなので、吸い殻を学校のごみとして捨ててよいのか、私も学校用務員さんも迷ってしまいました。すると、保護者ボランティアの人が、「私のうちで捨てておいてあげるわ」と言って、持って帰ってくれることになりました。

用務員さんに手伝ってもらったり、保護者ボランティアにごみを持って帰ってもらったりと、子どもも私も、さすがに想定していなかった事態です。「本当にこれでよかったのかな？ どうやって続けていったらよいだろう？」とカンファランスしました。「お助け隊」と銘打っておきながら、お助けされてばかりの子どもたちです。「うーん」と考え込んでしまいました。

でも、町をきれいになりたいと思っている子どもたちの意思は本物でした。彼らが出した結論は、最初からいくつかのビニール袋を用意して、分別しながら拾うことでした。用務員さんに教えてもらった分別の仕方通り、ペットボトルも缶も洗って捨て、用務員さんにもその都度報告することにしたのです。まだまだ、町にごみは落ちています。彼らのやる気の炎は、もっともっと燃え続けるはずです。

「あんたたち、ちょっと手伝ってくれない？」

小学校の隣にある公園でゴミを拾っていたときの事です。ある女性が声をかけてきました。話によると、この女性は公園の隣に住んでいて、公園の掃除をボランティアで引き受けているそうです。

「箒(ほうき)はたくさんあるから、ゴミや落ち葉と一緒に拾ってくれない？」

ゴミ拾いプロジェクトの子どもたちは、やる気の炎が吹きあがりました。落ち葉は、ゴミ拾いプロジェクトの子どもだけでは集めきれないほどたくさんあります。子どもたちは、クラスみんなに声をかけて、「協力してほしい」と頼みました。クラス全員で公園の落ち葉を集め、ゴミを拾っていきます。

「ありがとう。いつも一人では少しずつしかできないから、とっても助かったよ。ありがとう」

2年1組お助け隊の子どもたちが、町の人から初めてもらった「ありがとう」でした。

この女性との出会いは偶然でしたが、私はこの女性の連絡先を聞き、ちよくちよく連絡をとるようになりました。下校の時間、ゴミ拾いプロジェクトの子どもたちだけを連れて女性に会いに行き、次に落ち葉を拾う日を探ねたり、日頃の困っていることを聞いたりしました。すると出てきた言葉は、「小学生がゴミを落として困っている。注意をすることもあるが、よくなることはない。もう仕方ないと思っている」という話でした。

少し経ってから、このプロジェクトの子どもたちはある決意をしました。この決意が、ほかのプロジェクトを巻き込んで、大きなうねりとなっていきます。

子どもと遊んであげよう

学年の花壇でサツマイモを育てていました。そろそろ収穫時期です。個人面談でサツマイモの話題になったとき、相澤さんのお母さんが声をかけてくれました。

「あのサツマイモ、うちの園では壁に掛けるリースにしているんですよ。ボランティアで行きましようか？」

願ってもない申し出に、すぐに依頼しました。相澤さんのお母さんは、学区内で小さな保育所を営んでいて、活気にあふれるエネルギッシュな女性です。話は進んで、学校でサツマイモリースの先生をしてもらうことになりました。

収穫したあとのサツマイモの蔓を、ちょっと固いですが、コイル巻きのようにグルグルと巻いていって、束にしてから留めていきます。そこに、リボンや毛糸を巻いたり、折り紙を貼り付けたりして、思い思いのリースを完成させました。さすが保育園の先生、子どもへの指導も手際がいいです。

ここでつなげることができたのが、「小さい子どもと遊んであげたい」プロジェクトと相澤さんのお母さんです。「小さい子ども」プロジェクトのメンバーは、最初、1年生と遊ぶことを計画していました。しかし、町の人を助けるとなると、近所の保育所のほうが子どもたちの目的により近くなります。早速、子どもたちの背中を押して、相澤さんに自分たちの願いを伝えに行かせました。

そのあとは、私と相澤さんのコミュニケーションになります。できるだけ、子どもたちに意思決定を委ねたいと思っていましたから、大人同士で決めすぎたくはありません。その旨を相澤さんのお母さんもしっかりと理解してくださり、協力していただけることになりました。

早速、「小さい子ども」プロジェクトの子どもたちは、まち探検の際に保育所に行って、子どもたちと相澤さんの打ち合わせをすることになりました。

子どもたちは、相澤さんの保育所で「絵本を読んであげる会」と「手づくりの紙芝居を読んであげる会」を立ちあげ、3歳ぐらいの子どもたちを大いに賑わせたそうです。絵本の選書については、相澤さんからのアドバイスもありましたが、手づくりの紙芝居はプロジェクトのメンバーが休み時間などを使って丁寧に完成させていました。子どもたちは、保育所の子どもたちのために本当にがんばりました。

自分たちの会を楽しみに待っている保育所の子どもがいるとなると、すごい力を発揮するものです。相澤さんと私は、眠っていた子どもたちの力が発揮されたことに驚きました。

保育所の子どもたちから折り紙でつくったサンタクロースのお礼が届き、3月まで教室に飾られました。



子どもたちから届いたお礼

お店を繁盛させよう

まち探検で飲食店とかかわったのは、パン屋さんとカレー屋さんです。そのなかから、カレー屋さんのプロジェクトを紹介しましょう。

給食のない日、私もランチによく使っていた馴染みのお店でした。外国の方が経営している本格的なお店です。学区内にあるお店を教師が日常的に使っていると、学習のなかで活用するときに顔が利きますので、どんどん利用するのがおすすめです。

まち探検のときにカレー屋さんを見に行ったチームが、嬉しそうに集合場所に帰ってきて報告をしてくれました。

「ナンが焼けるのを見てきたよ！」

保護者ボランティアが引率してくれていましたので、あとで写真を見せてもらったのですが、一人ひとりがナンを焼くためのタンドール窯の中をのぞかせてもらったそうです。大人でもなかなか見られない道具を見せてもらえて、「面白かったー！」とホクホクした顔で帰ってきました。この頃から、「カレー屋さんにお礼をしよう」、「宣伝しよう」、「行列のできるお店にしよう」という目的が具体的なものになっていきました。

最初にしたことは、ポスターでの宣伝です。カレー屋さんの店名などを大きく書いて、教室の前に貼りだし、他のクラスの2年生に伝えようとしていました。しかし、ここで私はカンファランスのときに指摘しました。

「学校の近くにあるカレー屋さんなんだから、カレー屋さんがあることぐらいみんな絶対に知っているよ。もっと、お店のよさが伝わるポスターじゃないと店は繁盛しない。ポスターにどんなことを描いたら人気になると思う？」

そこで出てきたのが「おすすめメニュー」です。本格派のカレー店なので、聞き慣れないおいしそうなメニューがたくさんあります。

「今度のまち探検のときに、もっとしっかり聞いてこないと！」

インタビュー取材のスタートです。

まち探検に出掛けると、公園を掃除したいチームもあれば、保育所で打ち合わせをしたいチーム、花屋さんやパン屋さん、そしてカレー屋さんに行きたいチームなどが生まれます。複数の保護者に依頼をして、公園を

待機本部にし、南の保育所と花屋チーム、東のパン屋とカレー屋チームのように、方向によってルートを分けて、どのチームもプロジェクトが進められるように工夫しました。

こうなると、花屋のチームと一緒に保育所まで行ったり、パン屋のチームがカレー屋についてきたりと、ゆるやかな体験の共有が起きて、お互いのよい活動を真似しあうようになりました。カレー屋のチームがはじめたポスターづくりは、パン屋のチームにも派生していきました。



パン屋さんに飾られたおすすめメニュー

ポスターの内容も、最初はきちんと調べずに「おいしいよ」と書いてしまうような感じでしたが、取材をしっかりと進めて書くようになり、カレーやパンのおすすめのメニューや季節のメニュー、珍しいメニューの特集といったものになりました。また、調べた情報はかわいい店員さんが描かれたイラストの吹き出しのなかに入れられ、子どもらしい手づくり感のあるものになりました。

カレー屋さんのスタッフも、子どもたちが店の前を通るだけで手を振ってくれるようになり、親密さが増してきました。お店のレジの下には、手づくりのポスターや子どもたちが訪問したときの写真が飾られており、お店が学校の学習に協力して、地域に貢献していることをお客さんにアピールしています。学校だけでなく、お店にとってもメリットのある活動になっていきました。

個人から全体へ、全体からまた個人へ

子どもたちの学習の様子をそばで見ていると、収束したり拡散したり、目的に応じて個人・プロジェクトチーム・クラス全体と、学習サイズを自分たちの手で変えていくことに気づきます。もちろん、教師が支援をしている結果ですが、子どもたち自身が学習サイズを変えて目的を達成したいと自ら動きだすので、教師が「今日は、みんなで〇〇をやりますよ」などと言う必要はありません。今アプローチしている目的を達成するために

は、どのようなグループサイズが適切なのかについて、2年生の子どもたちでもしっかりと考えられる力をもっているのです。

とくに収束と拡散が顕著に現れたのが、まち探検の二つのイベントでした。一つ目に、学校内の発表イベント、二つ目に「おじいちゃん・おばあちゃんを喜ばせよう」プロジェクトの投げかけです。

12月 スマイル発表会で伝えよう

本校には「スマイル発表会」というものがあります。これは、休み時間にクラスで発表会を開くというイベントです。子どもたちや保護者に向けて、体育館のステージで学習成果を発表することができます。

これは、よくある学習発表会のようにすべてのクラスが発表するものではなく、有志のクラスだけが発表するというイベントです。参観するのも自由、出場するのも自由という子どもの裁量に任されたイベントです。出場すればクラスの雰囲気は盛りあがりますが、担任はそれに向けて学習時間を捻出して準備をしなければなりません。毎年、高学年を中心に発表が行われており、低学年が出場するということはそれほどありませんでした。

そんななか、カレー屋さんプロジェクトのメンバーがあることを言いはじめました。

「スマイル発表会で、カレー屋さんのコマーシャルをしたい！」

私は、ここで少し迷いました。スマイル発表会はクラス単位で出場するもので、カレー屋さんプロジェクトのメンバーだけが出場するといったものではありません。でも、もしかしたらほかのグループも出場して、一緒に伝えたいことが出てくるかも、と期待しました。

そこでカレー屋さんプロジェクトは、クラス全体にむけて、「スマイル発表会に一緒に出ませんか」と呼びかけました。それに対して、各プロジェクトの反応はさまざまでした。

パン屋さんプロジェクト——一緒にやりたい！ パン屋さんのおいしいパンを紹介したい！

お花屋さんプロジェクト——やらない。恥ずかしい。お花のポスターを描くことで十分。

小さい子どもプロジェクト——やらない。小さい子どもが見に来られないから。

おじいちゃん・おばあちゃんプロジェクト——伝えることがない。乗り気でない。

この段階で急に意気込みはじめたのが、ごみ拾いプロジェクトでした。

ごみ拾いプロジェクト——公園にごみがたくさん落ちていて、そのごみはうちの学校の子どもが落としていると、おばさん(公園の掃除をしてくれている女性)が言っていた。スマイル発表会は、学校の多くの人に伝えられるから、もっと町の役に立つ！

ごみ拾いプロジェクトの子どもたち、自分たちでごみ拾いをして、女性の話に共感し、何かアクションを起こしたい気持ちでいっぱいだったのです。スマイル発表会のタイミングもぴったりでした。カレー屋さんプロジェクトを中心に発表会が進行すると思っていたら、ごみ拾いプロジェクトのメンバーが次第に中心に立ち、クラスを動かしはじめることになりました。

子どもたちは、台本もないまま、すでに劇の練習をしはじめてしまいました。その劇が、なんとなく盛りあがって楽しそうだったので、周りにいる子どもたちも引っ張られていきます。ほかのプロジェクトの子どもが、劇の役者として協力しはじめるなど、クラス全体がスマイル発表会に向けて動きはじめました。もちろん、出たくないという子どももいました。その子どもたちは、役者として出るのではなく、道具係や音響係として働くということで折り合いをつけていました。

2年1組お助け隊の発表は2部構成になり、最初はカレー屋さんのクイズやパン屋さんのおすすめメニュー、そして後半は、「公園でごみをポイ捨てしたらダメ！」という、傍から見たらあまり脈絡のない二つのことが連続した発表になりました。子どもたちは、生活科ワークショップのなかで、教師の指示がなくても各プロジェクトが協力をして、劇の練習や小道具の制作などを行うといったように、自分の役割からクラスの役割へと変化させていったのです。

まち探検で、初めてクラスが一つになって動いた瞬間でした。プロジェクトごとに動いていたにもかかわらず、カレー屋さんプロジェクトのアイデアや、ごみ拾いプロジェクトのリーダーシップで、子どもたちはスマイル発表会で伝えるという目的のために一丸となって活動できた取り組みになりました。

1月 おじいちゃん・おばあちゃんを喜ばせよう

おじいちゃん・おばあちゃんプロジェクトは、発足当初から明確な活動がなく、私もどのように支援したらよいか思いあぐねていました。子どもたちのイメージは、「横断歩道を渡るおじいちゃん・おばあちゃんの荷物をもってあげる」でしたが、学校のなかにおじいちゃんやおばあちゃんはいません。道すがらのお年寄りに声を

かけるわけにもいきません。もちろん、重い荷物を持って必死に横断歩道を渡っているお年寄りなんて、子どもの頭の中にしかいませんでした。

しかし、打開策がありました。そのプロジェクトにかかわっている加賀くんのお母さんが、老人ホームのスタッフとして働いていたのです。そのお母さんと前々からアプローチをしていて、お母さんを通じて施設に折り紙を届けるという活動を子どもたちは行っていました。しかし、そこからの進展があまりなく、停滞しているという状態です。

折り紙は、施設の利用者の目に届くところに置いてあるということで、活動を発展させるべく、その折り紙をプロジェクトの子どもたちとともに見に行くことにしました。

寝たきりのおじいちゃんも使う憩いのスペースに飾られている折り紙。加賀くんはこの老人ホームを訪れることが多らしく、利用者に声をかけたり、簡単なお手伝いをしたりと、活躍する姿を見せてくれました。日頃はワイルドな印象の加賀くんですが、違った一面に気づくことができました。

プロジェクトの子どもたちと加賀くんのお母さん、そして私も加わって話が進んでいきます。この訪問がきっかけとなったのでしょう、加賀くんたちの熱が高まっていきました。

「おじいちゃん・おばあちゃんに、みんなで歌を届けるのはどうだろう」

学校の喧騒からすると静かな老人ホームです。子どもたちは寂しさを感じたのかもしれませんが。歌をプレゼントして、おじいちゃんやおばあちゃんに楽しんでもらいたいというアイデアがふつふつと湧きあがってきました。

ここで、プロジェクトからクラス全体へと大きく舵が切られました。「おじいちゃん・おばあちゃん」プロジェクトの子どもたちが、ミニ・レッスンの時間、ほかの子どもたちに向けて、「クラスみんなで協力して、老人ホームのおじいちゃん・おばあちゃんに歌を歌おう」と投げかけたのです。

私は、画面に老人ホームで撮ってきた会場や折り紙の写真などをテレビに映しました。ほかのプロジェクトに子どもたちも、クラスの目的である「町を助ける 2年1組お助け隊」を実現するために、瞳に炎が灯っています。「みんなで、おじいちゃんやおばあちゃんを喜ばせよう！」と、意気込んでいる様子がひしひしと伝わってきます。

その後、歌は何がいいか、自分たちが歌いたい歌なのか、それともおじいちゃんやおばあちゃんが聴きたい歌のかなどでクラスは紛糾します。加賀くんのお母さんやスタッフの人たちと子どもたちはやり取りを重ね、校歌や童謡、リコーダーなどを使った演奏をプログラムにすることにしました。

訪問する日までに、ホームを利用しているおじいちゃんやおばあちゃんに渡す折り紙をクラスのみんで用意し、聞きに来られない人にも気持ちが届けられるように準備をしました。

本番当日です。初めて老人ホームを訪問する子どもが多く、「憩いのホール」に集まってくれたたくさんの利用者やスタッフを前にして、子どもたちはかなり緊張していましたが、町の人から「ありがとう」をもらうために活動してきた子どもたちは、そんなことで尻込むわけにはいきません。しっかりと声を出して、おじいちゃんやおばあちゃんに元気を届けるために頑張りました。

子どもたちの歌を聞いて涙を流すおじいちゃんやおばあちゃんがいます。それを見て、さらに気持ちを高め、歌声を響かせる子どもたちの姿を想像してください。私にとっては、教師冥利に尽きる瞬間でした。

イベントは大成功に終わりました。イベントの最後、子どもたちは一人ひとりに折り紙を手渡していました。おじいちゃんとおばあちゃん、そして老人ホームのスタッフが子どもたちの手を取って、たくさんの「ありがとう」を子どもたちに届けてくれました。

目的は達成です！ みんな疲れていましたが、どの顔を見ても満足した表情をしています。2年1組お助け隊は、自分たちが生み出したプロジェクトがおじいちゃんやおばあちゃんの笑顔を生み、たくさんの感謝をされたことにこのうえない達成感を心に感じていました。

生活科ワークショップとは

これまで見てきた通り、生活科ワークショップは個人、プロジェクトチーム、クラス全体と、グループサイズを活動の目的に応じて収束と拡散を繰り返し、伸びたり縮んだりしながらゆるやかに連携していきました。各プロジェクトは独立していますが、孤立はしていません。お互いのやっていることをよく知っていますし、お互いのよいところをモデルにして見習いながら、自分の活動をもっと面白く、もっと目的にあったものに発展するために探究のサイクルを回し続けています。

社会科ワークショップと違って、ユニットの内容や活動を明確に線引きしたり、探究のサイクルの過程をメタ認知させたりするようなことはしませんでした。その分だけ、生活科ワークショップは「自分がプロジェクトのエンジンを回していくんだ」という一人ひとりの主体者意識を育みながら学習を進めていくことができました。

クラス全体で「町を助ける」という目的を共有し、各プロジェクトが自分の達成したいことをもって、それに向けて個人がつながりながら目標達成に向けて探究していったのです。クラス全体で一つの活動をする時間というのは、全体としてはあまり多くはなりません。

ミニ・レッスンは、共有の時間のようにほかのグループの現状を理解しあったり、今抱えている問題をクラス全体に相談したりする時間に使われ、教師が教えるための時間にはほぼ使われていません。本章で見てきたように、ミニ・レッスンにおける子どもの投げかけによって、活動が一気に進展していくことがあるのです。

授業の最後の時間は、振り返りを書いたり、ポートフォリオを整理するといった時間に使いました。ポートフォリオは学期末に持ち帰り、保護者からコメントをもらっています。保護者のほうも、「学級だより」を通じて生活科ワークショップでどのような学習が行われているかを分かっていますので、整理整頓が苦手な子どもも、生活科でやったことを自分の言葉で両親に話せたのではないのでしょうか。

教師がやらなければならないことも当然多くなるでしょう。各プロジェクトの進捗状況を見ながら、地域の人や学習材にどのような形で出会うと発展するのかと、考えることもたくさんあります。しかも、それが教師の狙い通りになることもあれば、予想外の展開に進んでいくこともありますので、計画といっても「あってないようなもの」になるかもしれません。しかし、そこが生活科の醍醐味なのです。

生活科ワークショップは、その不確実性を一緒になって楽しむという教師の余裕と安定感が重要です。教師の資質に支えられて、子どもたちの主体者意識が育つはずです。

地域にある学習材とつながりをつくってくれたり、まち探検の子どもたちの安全を守ってくれたり、保護者の方々には本当にお世話になりました。子どもたちと一緒に公園の清掃をしたり、タンドール窯をのぞいたり、「町を回って楽しかった」と言ってくれた人が多かったです。教師と保護者、町と保護者をつなぐパイプも太くなったように思います。保護者のみなさんが、2年1組の子どもたちの主体者意識を育てていく応援隊になりました。

低学年の子どもたちの中には、学校で大活躍したいというイメージをもって毎日学校に通ってくる子が多いでしょう。就学前のように、自分で学習のハンドルを握り、自分の思いを実現させていきたいものです。子どもたちが抱いているイメージが、教師の指示通りに動くことで満足してしまうのか、自分の思いを具現化することで達成感に変えるか、その成果によって、今後12年間の学校生活は大きく変わっていくことでしょう。

自分の思いばかりでは学校が成り立たないことを子どもたちでも十分に分かっています。教師が自分の思いを形にする機会すら提供せず、やることが常に決められている一本道の上を走らせようとするれば、子どもたちはハンドルを握ることすらなくなり、自らの本意を隠して教師の顔色をうかがって順応するか、一本道を壊してつかの間の自由を勝ち取るしかなくなります。どちらも、健康的な学校生活とはかけ離れたものとなっていくことでしょう。高学年になってからでは遅いのです！

学習を自分で創り出すという姿勢は、生活科で育てることができます。自立的な学び手への素地を生活科で芽吹かせ、社会科ワークショップのような主体者意識を育む学習によって幹を太くしていきましょう。

子どもたちは、学習のハンドルを自ら握って、自分の手で動かすという行為を自然な形で身につけていきます。このような子どもたちが高学年になれば学校は変わり、それによって町もまた変わっていくのではないのでしょうか。学校は町づくりの大切な要の一つです。社会科ワークショップのような主体者意識を育む学び方へ

と変えることによって、子どもが育ち、学校が変わり、町がいきいきと活性化していくことでしょう。主体者意識をもった学習は、子どもだけでなく、社会全体を変えていく力を秘めているのです。